

2 中高連携英語力向上 第2年次の歩み (2) 岐阜県立東濃高等学校における実践

<授業実践>

授業実践に向けての構え

本校では、1年生の4クラスとも26～27人のクラス規模のため、一人一人に目が行き届くが、ある程度英語力のある生徒もいれば、アルファベットも十分に身に付いていない生徒もあり、学力の差はクラス内でも大きい。

今年度の研究の重点の一つとして、昨年度に引き続き「基礎的な知識の定着」を設定した。上記のような現状を踏まえて、「時間はかかっても、まずは徹底的に中学校までの学習内容を復習することから始めるべきだ」という認識でスタートした。基本的な内容を繰り返し教える中で、生徒に「英語の苦手な自分でもできた、分かった」という成功体験を積み、学習意欲の向上につなげていけるような指導を心がけた。

また、中学校での実践から様々な指導法を学び取り、それらを高校での授業改善に役立てていこうという意識をもって、本プロジェクトに取り組んだ。

第1回授業交流研究会

【期日】 平成18年7月14日(金)

【公開授業】

- ・ 単元名 Lesson 7 助動詞(2)
- ・ 授業学校・学年 東濃高等学校 1年(分割授業のため、生徒数14名)
- ・ 主な提案内容

一通り助動詞の学習を終了したそのまとめとして、助動詞の部分だけを空所にした英語の対話文を作成し、生徒が会話の流れや話者の感情に合わせて適切に助動詞を選択することができるかを確かめる学習活動を行った。これまでの文法指導は文レベルでの機械的な操作に陥りがちであったため、少しでも実際のコミュニケーションの中での使用を意識させるため、対話形式の教材を作成した。

【授業研究会】

- ・ 助動詞の置かれる位置やその後の動詞が原形となるといった文法上のルールについては意識させることができたが、それぞれの助動詞の意味については、活動の中で十分に理解させることができず、正確に助動詞を選択することができない生徒が多かった。繰り返し確認し、定着を図る必要がある。
- ・ "must" = ~にちがいない、というように、形式と意味を1対1で覚えようとする傾向があるため、「~にちがいない」が「~に決まっている」という言葉に変わるだけで、生徒の中に混乱が生じてしまう。日本語と対応させることは必要だが、より多くの状況を提示しながら、どのような感情の時にどの助動詞を使うのかを、正しく理解させたい。
- ・ 文法授業の中で、コミュニケーションを意識させたいという授業者の意図は伝わったが、結局は空欄補充の作業に終始してしまった。完成した対話文を使って生徒同士でペアワークなどを行えるとよかった。また、クラスルームイングリッシュを全く使わない授業であり、コミュニケーション能力の育成、という視点がやや抜けていたのではないかと。

第2回授業交流研究会

【期日】 平成18年11月21日(火)

【公開授業】

- ・ 単元名 現在完了形
- ・ 授業学校・学年 東濃高等学校 2年（分割授業のため、生徒数18名）
- ・ 主な提案内容

情報実習室で視聴覚機器・パソコンを使用した活動を行った。導入のリスニング活動では「岐阜県まると学園」のホームページ、完了形の問題の答え合わせではプロジェクター、速読の練習ではインターネットの単語検索機能をそれぞれ利用し、授業を展開した。教師からの完了形の解説は最小限にとどめ、情報機器を利用した生徒の主体的な活動を重視した。

【授業研究会】

- ・ 英語の苦手な生徒に興味・関心を抱かせる手段として、情報機器の活用はかなり有効である。いろいろな手段を講じながら生徒を学習活動に導いていく必要があるが、問題の答え合わせ一つをとっても、黒板で解答するのと今回のようにプロジェクターを使って行うのでは、生徒の集中の度合いが違う。スクリーンに解答が一つ一つ表示される様子が、いつもと違う新鮮な感覚を与えたようである。教材の提示の仕方を工夫することで、生徒の姿勢は大きく変わることが分かった。
- ・ 授業全体としての到達目標がやや曖昧であったことが残念である。何を学ばせるのかをもう少し明確にすべきであった。また、授業は18人という少人数であったが、そのメリットが十分に活かされていたとは言い難い。答え合わせにおいても、どうしてそこが間違っていたかを全体の場で学ぶ機会があるとよかった。

<グローバル・スタンダードによる英語力分析調査>

【期日】 平成18年11月9日（木）

【受験者】 2年生選抜クラス（35名）と3年生選抜クラス（38名） 計73名

【結果分析】

上記の生徒を対象にTOEFL-ITPを実施した。平均点は昨年度とほとんど変わらなかった。2年続けて受験した生徒29名については、平均点が11点上昇している。中には50点近くスコアが向上した生徒もいた。

昨年度同様、学力や目的意識の比較的高い選抜クラスの生徒を対象に試験を実施したが、やはりクラス内においても力の差は大きいようである。本校の生徒にとってはかなり難しい試験であったが、外国語系大学への進学を考えている生徒にとっては、自分の実力を確認するよい機会になった。

<学習環境の充実>

下記の教材を購入

- ・ 「スクリーンプレイ」 初中上級レベルから7冊（音声CDとDVD付き）
 - ・ 「Encyclopaedia Britannica Ultimate Reference Suite 2006（DVD）」
 - ・ 「Understanding and Using English Grammar Interactive Network Ver.（Longman）」
- 授業中でのリスニング活動として「スクリーンプレイ」を利用した。有名な映画が教材ということで、生徒の反応も良く、登場人物の話すスピードの速い英語をなんとか理解しようとする姿勢が見られた。授業の中で利用するには、視聴覚設備の整った特別教室を使う必

要があり、また教科書の進度との兼ね合いもあるため、毎時間の利用は難しい。授業での活動をきっかけにして、生徒が個々に教材を借りて、個人的な学習に役立てていけるように働きかけていきたい。また、その他の教材についても、生徒への利用の呼びかけはもちろん、部分的に教材に利用するなど、授業での活用も今後検討していきたい。

可児市教育委員会学校教育課の小川裕美先生による国際理解の授業

【目的】本校に在籍している外国籍（フィリピン）の生徒の国と言語について学習することを通して、全く理解できない言語に囲まれて生活することの大変さを理解させる。

【実施日】平成19年2月6日（火）、7日（水）、8日（木）、15日（木）

【対象】1年生4クラス

【内容】2時間通しての授業とし、1時間目はフィリピンについての基礎知識（言語・地理・歴史など）をクイズ形式で理解させた。2時間目は、フィリピンの公用語であるタガログ語を取り上げ、本校の外国籍生徒に協力してもらいながら、表現や発音を学習した。

< 成果と課題 >

この2年間、中学校での英語授業の実践を学ぶ機会を得られたことは、高校の特に1年次における指導の在り方を考えるよいきっかけとなった。大きな声で発音し、活動にも生き生きと参加する中学生の姿を見るたびに、どうして高校に入ると声が出なくなるのか、どうして興味を示さなくなるのか、という気持ちになったが、生徒が自然に変容していくのではなく、我々教える側が彼らの学習意欲・態度に水を差しているところがあるのではないかと反省した。音読の指導一つとっても、どれだけの工夫をしてきたか、クラスルームイングリッシュをどれだけ使ってどれだけ生徒に働きかけたか、と振り返ると、これからの授業に大いに改善の余地は残されている。

中学校での2回目の授業研究会の際、音読の必要性が話題となった。空欄補充プリントを作成したり、ゲーム的な要素を取り入れたり、音読一つとっても様々な工夫が可能であることを学ばせていただいた。本校でも音読の重要性が再確認されてきているが、指導の仕方によっては、声を出す雰囲気を作り出すことができた。しかし、その雰囲気を一つの指導パターンで持続させるのは難しい。中学校での授業から学んだ様々なパターンを今後試してみたい。

基礎的な知識の定着のため、1年生に対しては4月から夏休み前まで中学校の英文法の復習を行った。時間をかけて丁寧な指導を行ったが、一部の生徒からは高校の教科書に早く進みたいという声もあった。また、夏休み前までの集中的な指導が基礎・基本の定着につながったかと言えば、1年生の現状を見ると疑問が残る。ある程度の学力レベルにある生徒と、そうでない生徒が混在するクラスの中で、どの生徒に対しても力を付けさせてあげられるようなきめ細かな指導を今後も検討していかなければならない。

きめ細かな指導という点では、本校では1,2年次において週2時間少人数授業を実施しており、一人一人の学習活動や到達度を確認しやすい状況にある。少人数を生かした指導法についても、今後検討を重ねていきたい。